Ⅳ-302　路上の私的占有からみた路地・細街路空間の機能に関する調査研究

日本総研　正会員○峯村健司
大阪大学　正会員　盛岡　通
大阪大学　正会員　城戸由能

１．研究の背景と目的

都市内における街路は交通機能が重視されるものからコミュニティ形成の役割を果たすものまで多様に存在している。一般に街路整備が行われる場合、安全性の面からみた歩行者と自動車の兼ね合いが主に注目され、人々が路上で繰り広げる様々な行為、活動にかなりの制限をする結果となっている。本研究ではこのような人々の行為、活動が表出している街路空間の中でも、特に"生活、暮らしの場"としての意味合いが強い「路地・細街路空間」を対象にその利用形態の実態調査・分析を行い、その空間特有の性質、沿道住民との関係を抽出し、新たな路地・細街路の空間計画への適用を考察する。

２．路地空間の分類と構成要素

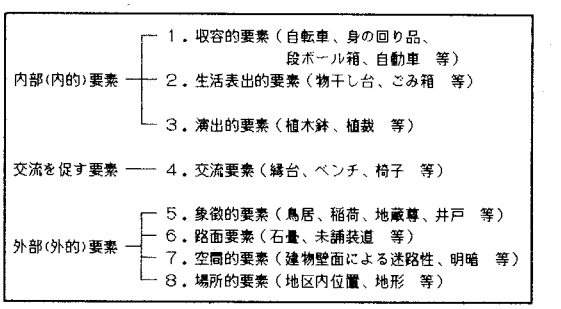
２－１　形態からの分類

路地とは元来、"茶室への通路"、"家と家との間の狭い通路"の意味で、まちが形成される過程の中で自然発生していった余剰空間的存在であり、その発生形態は以下の３つに分類できる。

①畦道としての路地・・・集落や市街地の空間的な骨格として設定された路で農村集落などに共通してみられるもの

②高密化による路地・・・市街地の空間が高密化する際に生じたもの

③庭としての路地　・・・茶道でいう庭としての「路地」の範疇にはいるものであり半ば公的な通り道としての路地



図－１　路地空間を構成する要素

２－２　路地空間の構成要素

具体的にどの様な要素が路地の表情を構成しているかの分類を図－１に示す。この分類を基に大阪市内および近郊の計４地区（表－１）を対象に路地を構成する要素、特に一住戸が面する路地空間を調査単位として、各要素の道へのあふれだしに重点をおいた観察調査を行った。

表－１　調査地区

豊中市庄内－－－千成町２丁目
東淀川区淡路－－東淡路４丁目
中央区谷町－－－谷町６丁目
福島区西野田－－野田2､5丁目

３．調査および分析結果

調査により抽出された事例を図－１で示した内的要素、交流要素について分析するものとする。

３－１　内的要素

住戸まわりでみられる内的要素（収容､生活表出､演出の３要素）について実地調査を行った結果、単独の要素のみがあふれ出していた事例と共に、これらの要素が複合して住戸まわりにあふれ出している事例も数多く存在した。単独のタイプ３種と、複数の要素からなるタイプ３種の計６種（Ⅰ～Ⅵ）の類型を表－２に示す。さらに、路地の特性として「嗜好性」、「開放性」をあげる。

表－２　内的要素の複合による類型

類型名称	あふれだしのタイプ
Ⅰ：収容型	収容的要素
Ⅱ：生活表出型	生活表出的要素
Ⅲ：演出型	演出的要素
Ⅳ：利便型	収容的要素＋生活表出的要素
Ⅴ：調和型	生活表出的要素＋演出的要素
Ⅵ：混在型	演出的要素＋収容的要素

「嗜好性」・・・後背の住民が自らの好みに合わせて路上の空間を利用できる性質

「開放性」・・・内と外とが開放的であり、私的な生活面が表出しやすい性質

これらを分析軸として６種のタイプをプロットした結果を示す（図－２）。また、定義した各パターンの調査地区における特徴を以下に挙げる。

Ⅰ．収容型・・・・各調査地区で存在し、学校、寺院、工場などに隣接する住宅地の端部に典型的な事例（路上駐車等）が分布している。

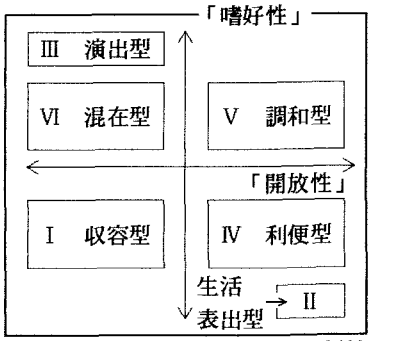
Ⅱ．生活表出型・・あまり多くは見られず、特殊な路地内（明暗の対照がある箇所や鳥居にはさまれた箇所）に分布している。

Ⅲ．演出型・・・・かなりの数分布しているパターンで、比較的人通りの多い路地で目だつ。淡路地区でこのパターンが最も発達していた。

Ⅳ．利便型・・・・極端に幅員が狭い事例が多く、ほとんど人通りが無いであろう路地に分布するパターンといえる。

Ⅴ．調和型・・・・比較的幅員も広く、人通りのある路地でみられ、内と外の開放性があり、かつ、住民の嗜好的な面も見られる事例といえる。一方、行き止まり状の路地であふれだしが極端な事例も見られた。

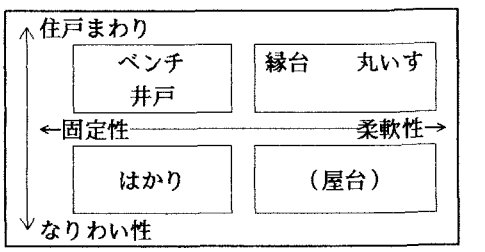
Ⅵ．混在型・・・・人通りが多い地区内に散在しており、看板などのなりわい的なものが植栽に彩られた組合せが多く、ユニークな要素も含んでいる。



図－２　内的要素のタイプの分類軸

３－２　交流要素

各地区における調査によって縁台、ベンチなどが観察された。路地の使い分けの観点から「空間利用の柔軟性」、表出する要素の違いから「住戸まわり－なりわい性」という軸をとったところ図－３のように分類された。「柔軟性」を示す交流要素は路地の大きな特性の一つと考えられる。



図－３　交流要素の分類

３－３　外的要素

外的要素の特徴は、住戸ごとによる操作の難しさと他の街路との空間的な異質性をかなり有していることが挙げられる。例えば、象徴的要素として「稲荷、鳥居、地蔵尊」などが小スケールで設置され、独特の雰囲気を醸し出していたり（谷町等）、廃止された市電の敷石を用いて住民自らの手で舗装された路地（西野田）が地区内の特徴的な空間を形成している事例が挙げられる。

４．考察および今後の路地の機能

調査の結果および分析軸によるプロットから、鉢植え、植栽等の演出的要素と、ものほし・ごみ箱等の生活表出的要素が組合せとなった調和型の利用が、人間的なスケールでなお住民の暮らし向き、好みを表出することができることを明らかにした。また、演出的要素について注目すると、この要素は他に比べて数量的にも多くみられ、路地の「表情」を決定づける度合が大きいといえる。さらに、路地という共有的な空間を通じて、通行する人々に一種のメッセージを伝える役割も持つということができる。次に、生活表出要素については、実際に洗濯物を干しながらの主婦のおしゃべりが観察されたように、生活感があふれてさえいればよいというのではなく、そうした行為要素が近隣のまとまりを強めてたり、保っている要因になっていることに注目すべきだと考えられる。

一方、交流要素の中には大きく路地の雰囲気や役目を変容させるものがみられた。近隣のまとまりを示したり、習慣的な性格があるということと共に、空間を都合よく使い分け折り合いを保っている好例といえる。

最後に、自然発生的であり、残存していくのが困難であろうこうした空間における良好な機能についてはその形式のままで保っていくという視点と共に、現代都市の中でも適用できるような「読み替え」を行い、路地の人間的なスケールおよびその魅力を新しい計画と調和させていくことが重要であるといえる。

参考文献：藤森照信、橋爪紳也他、「都市の路地空間」日本ナショナルトラスト 1987